

桃花流水下

陳舜臣



舜臣

花流水
下



朝日新聞社

桃花流水(下)

定価八八〇円

発行

昭和五十一年十一月三十日

著者

陳舜臣

装画

横塚繁

装幀

熊谷博人

発行者

角田秀雄

印刷所

凸版印刷株式会社

発行所

朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

©Chin Shun Shin 1976

0093-254420-0042

目

次

戦火の裏	状況	水路	哀歎多し	雨の声	遠い遺書	金星台	風と光	細い道	風塵	齒車	浅みどり	華清池	盛夏
------	----	----	------	-----	------	-----	-----	-----	----	----	------	-----	----

101	190	197	151	154	136	108	94	80	66	55	45	30	7
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	---

遠望

真相

棕櫚の家

百花洲

母の背

きらめく胸

二八

三〇

三三

三五

三六

三七

桃花流水
（下）

盛 夏

西安の夏は暑かった。それでも空気が乾燥して、むしろむししないので、あんがいしのぎやすい。かりにどんなにむし暑くても、父と一しょに暮らせたのだから、碧雲はかりそめにも苦情を口にする気持にはならなかったであらう。

程範は仕事の合い間をみては、碧雲を連れ出して、長安のまちを散策した。

父がどんな仕事をしているのか、碧雲は知らなかった。またそれを父に訊く気持にもなれなかった。どんな仕事にせよ、この国が駄目にならないようにすることにつながっているのだから。

どんな形になるかわからないが、自分も近く、父の仕事を手伝えるのだと思うと、碧雲は深いよろこびをかんじた。そのために、いまはいろんなものを、よく見ておかねばならない。

父の仕事が、おおっぴらなものでないことだけは、彼女も察しがついた。一しょにまちを歩いていて、父が急にむきをかえ、路地にはいったことがある。

「顔を見られてはまずい人が来たの？」
と、碧雲が訊いた。

父は苦笑して

「いや、そんなことはないのだが、どうも癖になつてね」

「癖とは？」

「まえばそうだったのだよ。秘密裡にうごくことが多かった。いまは、そうだね……まったくおおっぴらでもないが、以前ほどかくれる必要もなくなった。それでも、つい癖が出るものだ」

父のほうからも、彼女にいろんなことを訊いた。父が熱心に訊いたのは、非幻庵のことであった。上海以来の碧雲のうごきについては、父もたいいのことは知っているようであったが、非幻庵のことだけは、よくつかめていないらしい。

「どこにつながっているのかな？ すくなくとも、私の知らない線だね。……北京には、いろんな線が、複雑にiriみだれているのだが。……」

非幻庵については、父はよく考え込み、

「くわしく調べてみよう」

とも言っていた。

西安にいても、北京のそのような組織を調べる事ができるらしい。非幻庵のことは、文素容から、絶対秘密と言われていたが、碧雲は父だけに、詳細に語った。どんな秘密も、父にはかくすことはないのだ。

帰国して以来、どうやら碧雲は父の敷いたレールのうえを走ってきたようである。ただ非幻庵の部分だけは、父の用意したレールからはずれているらしい。父はそこを慎重に点検しているようだった。

文素容についても、父は根掘り葉掘り訊いた。残念なことに、碧雲が父に提供できる情報は、そんなに多くなかった。彼女がそれを詫びると、父は

「いや、たいそう参考になったよ。それでじゅうぶんだよ」

と言った。

碧雲が西安に滞在しているあいだにも、北京の情勢は刻々と変わった。――

廬山談話会の『最後の関頭』声明は、全国に澎湃^{ほうはい}としておこった『救亡』――亡国となるのを救おう――の声をなだめるために出されたのかもしれない。よく読んでみると、いまの時点では、まだ最後の関頭にいたって

ない、と解釈できる文脈である。

現地の最高責任者である宋哲元は、新しい天津軍司令官香月中将への『挨拶』という名目で、七月十八日に天津へ行き、遺憾の意を表わした。そのとき、彼は日本側の要求をほとんどうけいれ、その協定の実行を指導するため、翌日、北京へ帰った。その日――七月十九日、日中双方のあいだで、細目協定が結ばれたのである。その細目とは、日本側が中国現地当局に、共産党への弾圧、排日団体の解散追放、排日運動や言論の取締りなどをせまったものだった。この細目協定が結ばれたのは、廬山演説のあった日で、日本側は橋本参謀長、中国側は張自忠が代表であった。

ところが、おなじ日、南京では中国側が日本の日高参事官にたいして、

――地方的に解決するのは容認できない。

という内容を含んだメモを提出した。

地方的性質をもった問題なので、地方的に解決しようというのが日本の基本的な姿勢であった。ところが、軍隊の移動も含む問題は、あきらかに国家的性質をもっている。地方的に解決されると、南京政府としては立つ瀬がないのである。

日本は勢力圏をひろげ、華北を第二の満洲国化するた

めには、そこが、中央政府の力の及ばぬ地域である、という既成事実をつくっておきたい。南京は、そうはさせじと抵抗したのだ。南京のメモには、

——この紛争を国際仲裁裁判に付す。

ことをも提唱していた。

事件を国際的にすれば、他国の領土に踏みこんでいる日本のほうが分がわるいのはいうまでもない。

右のメモは、『地方的に』解決するのを認めないだけで、解決そのものに反対したのではない。日本側の要求を、決然として拒否したのではないのである。このあたりに、からくりがあった。

中国は全土が沸きかえるように激昂している。南京の指導層も、それを無視できなくなっている。日本にたいして、強い態度でつっぱねた、という姿勢を国民に示さねばならない。このメモも、廬山演説とおなじ根から出たのである。

じじつ、日本側でも、この南京のメモを、事実上の拒否とうけとる説が強かった。

その直後、南京から参謀次長の熊斌が北京へ派遣された。彼の任務については、新聞でもいろいろと取沙汰され、

——抗日戦争を督励するため

——現地での妥協を命令するため

という正反對の臆測が、ならんで記事にされるようなありさまだった。

「現地協定を追認するために行ったのだ。それ以外には考えられない」

程範は時局について、娘にそう解説した。

宋哲元は迷っていた。追い詰められて、日本側の要求をのんだが、この屈辱的な屈服に、民衆は憤激している。民の怒りはおそろしい。それに、南京がはたしてこの屈服を認めてくれるかどうかも気がかりだった。

——この屈辱的な協定を実行すべきか否か？

最高責任者が迷っているのに、命令は徹底しない。細目協定締結後も、トラブルが続発した。それでなくても、民衆の抗日意識はたかまつている。

——迷うな。協定を実行せよ。

南京はそういう命令を伝えたかったのである。参謀次長を派遣したのは、状況が微妙であったからなのだ。その命令は、日本への屈服を認可したものだが、おおびらに伝えかねた。民の怒りを爆発させるおそれがある。これからも、民衆をなだめながら、切り抜けて行くためには、高等戦術も必要であろう。たとえば、口で強硬なことを言いつづけながら、じっさいには日本側に妥協す

るといった綱渡りである。

「その策を授けに行つたのだから」

と、程範は言つた。

廬山會議には、共産党も招かれている。すでに第二次の国共合作にはいつていた。廬山では、共産党代表周恩来が、

——これ以上の屈辱を忍ぶべきではない。断乎として戦うべし。民族と国家の保衛にはそれ以外に道はない。と、南京に決意を迫っている。

南京も迷つていたのだつた。国民党の支持者である資産階級のなかには、戦争を欲していない部分がすくなくなかつた。といつて、彼らもこのまま日本に領土を蚕食されるのを、座視しようとするのではない。戦争以外の手段——すなわち、国際輿論の力で、日本に手をひかせることを望んだのである。

南京メモのなかに、国際仲裁裁判に言及したのは、そのような背景をもつていたからなのだ。

「日本の軍部は、国際輿論などをまったく気にしないはずだ。そんなものが、日本に圧力をかけうると考えるのが、そもそも非現実的だよ。そうなれば、われわれのとるべき手段は、戦争しかないではないか。このことは、碧雲もはつきり覚悟するんだよ。乱世に生をうけた、

と」

程範はさとうすように言つた。碧雲はなんともうなずいた。

（乱世。——）

歴史の書物に封じこめられた言葉かと思つていたが、それがなまなましくよみがえつてきたのである。

国際輿論などよりは、民の怒りのほうが強い。南京の認可をとりつけたのに、現地の責任者の宋哲元は、屈辱的な撤兵をともに実行できなかつた。民の怒りが、彼に圧力を加えたのだつた。

西安の新聞の伝えるところによれば、日本の要求によつて、抗日的な三七師の將兵を移駐させることになつたが、宋哲元はいったんそれを命じておきながら、七月二十三日にそれを中止したという。

細目協定が締結されたころ、北京の情勢は一時緩和にむかつたが、七月二十三日の撤兵中止によつて、再び緊迫してきた。

軍隊内部に、とうぜん撤兵にたいして不満の声がおこり、それがクーデターに結びつきかねない勢いとなつたので、軍長の宋哲元も撤兵中止に踏み切つたという。撤兵を強行すれば、彼自身の政治的生命が危うくなる。彼は部下と日本側とのあいだで、板挟みになつていたので

ある。

——宋哲元軍長は、徹底抗日を決意したぞ。……

撤兵中止のしらせで、二十九軍の將兵のあいだに、そういうけとった者がすくなくなかった。はたして、それ以後、各地で紛争がおこったのである。

七月二十五日の夜、天津と北京のあいだの廊坊^{ろうぼう}というところで、兩軍の衝突がおこった。深夜の出来事なので、翌日の新聞には、まだ記事として出ていなかった。だが、七月二十六日の夕刻近くには、程範は廊坊事件のことを知っていた。

「廊坊の駅の近くで軍隊の衝突があった」

彼が娘の碧雲にそう教えたのは、郊外にある慈恩寺の境内を散歩しているときだった。新聞社にいる友人を訪問して、宿舎に帰った程範は、夕食がすんだあと、娘を散歩に誘ったのである。

さすがにひるまは暑い。散策は夕方の方がよい。市民たちも、家のなかにいるよりは、すこしでもすずしい戸外に出て、涼をとろうとしていた。木陰にベンチをもち出して、将棋をしている風景などは、日本とあまり変わらない。

慈恩寺までは洋車に乗って行った。永寧門を出て、ほぼ六キロのところにあった。寺の境内にある『大雁塔』

は、あまりにも有名である。

千三百年もまえ、唐の玄奘^{げんざう}がはるばるインドに渡って、その地で得たおびただしい經典をおさめたのが、この大雁塔である。玄奘はこの慈恩寺で、訳経の仕事にうちこんだのだった。

大雁塔は高さ約六十四メートル、基底は正方形で、ほとんど装飾のない、七層の安定感のある建造物なのだ。暮れなずむ夏の空を背景に、その大雁塔を仰ぎながら、程範は、

「昨夜から今朝にかけてのことだった」

と、つけ加えた。

「廊坊ですか。……」

碧雲は天津から北京へ列車に乗ったが、途中に廊坊という駅があったのを思い出した。

「そう、廊坊だ。天津と豊台のちょうど中間ぐらいのところだな」

と、程範は言った。

「それで、どんな情勢になってるんですか？」

と、碧雲は訊いた。蘆溝橋の銃声の余韻はまだ消えていない。銃声が銃声のうえに重ねられて行く。——彼女はからだの芯が、ひきしめられるのをかんじた。

日本軍一ヶ中隊が、鉄道保護と電線修理のためという

名目で、廊坊へ進駐し、宿舍の交渉から、中国軍と紛争をおこし、射ち合いをはじめたという。日本軍は五ノ井中隊を天津から派遣し、さらに鯉登連隊に進発を命じた。早朝には空軍も出動して、爆撃したということであった。

廊坊の中国軍は、空陸の立体攻撃をうけて敗走した。

兵は迅速をたつとぶというが、日本側の動員のあまりの神速さに、中国側は、

——日本軍が仕掛けてきたな。……

と、うけとつたのである。

「廊坊で日本軍と衝突したのは、三八師の兵隊だったよ」

程範は大雁塔を見上げながら言った。

「三八師？ 三七師じゃなかったのですか？」

碧雲はそう訊き返した。

馮治安^{きん}麾下の三七師は、抗日意識の強い軍隊であった。蘆溝橋^{きん}のときも、この三七師であったし、日本軍は目の仇のようにして、その撤退を求めたのだった。それにくらべて、日本視察から帰ったばかりの張自忠の率いる三八師は、これまで日本軍といちどもいざこざをおこしたことはない軍隊である。日本側からみれば、三八師はこ

れまで『模範的中国軍』といってよかった。

「まちがいに三三八師だった。私も三七師の誤りではないかと、新聞社でなんども電報をたしかめてもらった。三八師の二二六団、司令官は劉振三ということがわかった」

と、程範は答えた。

「でも、三八師は張自忠將軍の部下で、おとなしいという評判だったのでありませんか？」

「廊坊での戦いは、張自忠の命令があったかどうかは、まだ確認できていない。いずれにしても、三八師にまで抗日意識は燃えひろがった。……とうぜんのことだ。中国人ぜんぶが燃えた。行くところまで行かねば、おさまらないだろう」

程範と碧雲の父娘は、大雁塔の前へゆっくりと足をはこんだ。

塔の南門の左右に龕^{がん}があり、それぞれ石碑がはめこまれている。左龕のものは、

——大唐三藏聖教序

と題され、名筆と謳^{ちやうすい}われた褚遂良^{しゆいりやう}の書であった。

碧雲は石畳のうえを歩く父の靴の音が、自分の心臓の鼓動に、重ねられるような気がしてならなかった。

「パパとはもうあまり長く一しよにいられないようね」

と、彼女は呟くように言った。

「そうだね。……蘭州行きが、ひょっとすると早くなるかもしれない」

と、程範は言った。

仕事のために、別れねばならないと言っていたが、別れて行く場所を、彼がはっきりと口にしたのは、これはじめてである。

「蘭州。……」

この西安より、ずっと西にあたる。甘肅省の省都なのだ。この西安の市民にとっては、ことしのはじめまでいた、灰青色の軍服をまとった、東北軍や西北軍が移されたまち、といったほうがわかりがよいだろう。

去年の十二月十二日の、いわゆる『西安事件』で、共產軍討伐を命じられた張学良の東北軍や楊虎城の西北軍が、

——中国人同士で戦うよりは、侵略してくる日本軍と戦うべきだ。

と、視察にきた蔣介石を監禁する『兵諫』をおこした。兵をうごかして諫めたのである。その結果、話し合いがおこなわれたのだが、善後措置として、東北軍や西北軍は蘭州へ移され、この西安には中央軍がはいってきた。まちで見うける兵士は、カーキ色の中央軍の制服である。

先日、碧雲は父に連れられて革命公園へ行ったが、そのとき、兵諫として蔣介石に要求した『八大綱領』を、張学良がそこで民衆に説明したという話をきいた。

革命公園における民衆大会は、去年の十二月十六日にひらかれ、碧雲の父は、それに参加したという。

八大綱領というのは、

- 一 南京政府を改組し、各党各派の参加を許すこと
- 二 一切の内戦を停止すること
- 三 上海で逮捕された救国の領袖（抗日七君子）を釈放すること
- 四 全国の政治犯を釈放すること
- 五 民衆の愛国運動を解放すること
- 六 人民の結社集会の政治的自由を保障すること
- 七 孫総理の遺志を実現すること
- 八 即時救国会議を召集すること

といった要求である。孫文の遺言とは、容共政策を意味した。

半年まえ、世界を震撼させた西安事件は、まだなまなましい。その現地を歩きながら、碧雲は父から、

——あの建物を東北軍が包囲したんだ。

——あそこで、西北軍司令の楊虎城が、張學良と要求条項について協議したという。

——あのあたりで、短い射ち合いがあったそうだと、いちいち指さしての説明をうけた。

飛行場へも行った。そこでは、ことしの元旦に、東北軍と西北軍の新年閲兵式がおこなわれたという。毛皮帽をかぶった東北軍の騎兵隊の行進は圧巻であつたらしい。

そんな説明を思い出して碧雲は、

「ここにいた軍隊のあとを追って行くのですね？」

と、訊くともなく口にした。

「そうだね。……いまはたいして大きくないまちだけれど、これから重要になるところだ。海岸から遠いからね」

程範は自分が行くことになっている蘭州について、そんな説明をした。

「海岸から遠いつて？」

重要になるのが、海岸から遠いのと、どのような関係にあるのか、碧雲にはすぐにはわからなかった。

「そうではないか。日本は海から攻めてくるのだから、そこから遠いということは、大きな意味をもつ」

碧雲の父は明快にそう説明した。

「軍隊はなかなかやって来られないかもしれないけれど、

空襲は……」

碧雲はあらためて、大雁塔を仰いで、心配そうに言った。

「そうだ。飛行機は日に日に発達している。しかし、どんな爆弾も、われわれの心のなかまで粉碎することはできない。また日本の国力からみても、われわれの後方基地にたいする空襲を、長期にわたって続けることはできないだろう。こわされても、また建てる、それを焼かれても、三たび建てる。……不屈の心が大切だよ」

「わかりました」

褐色の大雁塔は、背景がようやく暗くなりかけたので、その輪郭が一そうくっきりとしてきた。彼女はその塔を仰ぎつづけた。

「碧雲がいまなにを考えているか、私は知っているよ」と、彼女の父は言った。

「まあ……」

「こわされても、また建てる、と私は言った。碧雲はこの大雁塔を見上げて、基地や工場なら、建て直しもできるだろうが、歴史的な遺跡は、いったんこわれてしまえば、もうおしまいだと考えていたのじゃないか？」

「まあ、パパ、そのとおりよ」

碧雲は、ながいあいだはなれていても、やはり父と子